
7 t h D O R A G O N 2 0 2 0 一崩レ行ク世界デ

水無月 廿日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7thDRAGON2020―崩レ行ク世界デ

【Nコード】

N0855Z

【作者名】

水無月 廿日

【あらすじ】

2020年―世界は異界の花と竜に支配された。

同じ悲劇を繰り返さないため剣をとった少女『ミナト』

退屈な世界に飽きた少女『めぐ』

父親の力になるために戦う少女『琉衣』

それぞれの思いを胸に
3人の竜を狩る物語は始まる

C a p t e r 0 . 0 —それぞれの前夜—（前書き）

どうしても書きたいシーンがあるので書き始めました。

拙い文章ですが楽しんでもらえたら幸いです。

Capte r 0 ―それぞれの前夜―

都内某所

「遂に来たね。」

「そうね…」

誰も知らないその場所に2人の少女がいた
一人は腰に二振りの剣を差している
もう一人は腰まである青い髪が特徴の少女だ

「今度は…勝てるかな？」

「それは解らない。絶対的な力に勝つには力が必要なのだ。」

「私は…力に嫌いだ。強い力は身を滅ぼす気がするの。大切な物も
なにもかも壊れる気がする。」

「それは使いの次第よ。間違った使い方をするれば力は自分に牙を向
くの。だから貴女は間違えないで。」

「うん。」

「そろそろ時間じゃない？」

「そうだね。行ってきます。」

「行つてらっしゃい。また後で会いましょ？」

その場所と、青い髪の少女に別れを告げ少女、『ミナト』は始まりの場所東京都庁に向かった。

都内某所―商店街

「貴方達…誰？」

数人の黒服の男に囲まれた一人の少女。

名前は兎^{とかの}我野 めぐ

つい先日謎の火災により中学校が全焼する事件があつたのだが、その生き残りの一人だ

「自己紹介が遅れました私達はムラクモ機関の者です」

「ムラクモ機関…あの？」

「はい。」

めぐは少し驚いていた。

都市伝説として噂が流れていたマモノ討伐を主とする機関そんな怪しい機関が目の前にいるのだから。

「マモノ討伐が仕事の貴方達が何で私によろ…なの？」

「それはですね、近々機関の候補生の選考会が東京都庁で……」

「そう。」

「強いては貴女に参加してもらおう為に——うわっ?!」

話していた黒服が声をあげる。

見ると服がめらめらと燃えていた。

「長いわ。私、男の人嫌いなの。燃やしたくなる。」

淡々と喋るめぐ。

他の黒服にも火を放ちその場を去る。

「こんなつまらない世界……壊れればいい。」

そう言い残し、闇の中に消えていった。

「お、お母さんこれ見て！」

「どうしたの琉衣？」

「ムラクモ機関から召集状が来たの！」

青森県某所

とある少女の家

少女の名前は芦羽^{あしは} 琉衣^{るい}
元氣一杯の高校生だ。

「ムラクモ機関……」

召集状をみて琉衣の母親は顔を歪める。

「貴女はどうしたいの？」

「私？……行ってみたい……かな？」

「そう……」

琉衣の母親は悩んでいた。

この娘を父親と同じ場所へ送っていいものか……
できることなら平和に暮らしてほしかった。
しかし、

「だって父さんの力になれるんだよ！」

父親の力に為りたいという娘に、「行かないで」とは言えなかった。

「行って来なさい。」

「うん！」

玄関で琉衣を見送る。

怪我などしませんように……
母親はそう願っていた。

C a p t e r 0 . 0 —それぞれの前夜—（後書き）

ちなみにセブンスドラゴンクリア済です。

c a p t e r o カウント、ゼロ 1（前書き）

ミナト、めぐ、琉衣を13班にするか悩み中の今日この頃。
新しい班でも作ろうかな？

chapter0 カウント、ゼロ 1

——『ミナト』視点

「や、やっとついた…」

結論から先に言うとは私は試験に遅刻してしまったみたいだ。

都庁前の広場には候補生らしき人影はなく、いるのは自衛隊の面々と試験官らしき二人だけ。

遅れてきた私に気づいたのか、眼鏡をかけた青年が近づいてきた。

「ムラクモ候補生の娘だね？ えっと…」

「ミナトです。」

「そっか。僕はキリノよろしくね。うーん…ミナト君かあ…どうしような…」

資料を見ながら唸っているキリノさん。

ふと隣にいる女性に目を移した。

「…日榮ナツメよ。ムラクモ機関の長をしているわ。…今日はどうして遅れたのかしら？」

「道に迷ってました。」

簡潔にそう答えた。

「そう…いいわ。キリノ、ガトウに連絡を。候補生2人追加よ」

「はい！」

いい返事の後にキリノさんは何処かへ連絡を取り始めた。

多分ナツメさんの言っていた、『ガトウ』とかいう人の所だろう。

…………あれ？

そういえばナツメさんは候補生が2人って…

「あの…他にも遅れた娘がいるんですか？」

不思議に思いそう聞いたのだがナツメさんは首を傾げて私に言う。

「その腰にくっついてる娘？知り合いじゃなくて？」

「えっ？」

ナツメさんに言われた腰の辺りを見ると少女がくっついていた――

「だ、誰?!」

都庁の広場に私の声が響いた――

―めぐ視点

本当は行く気も無かったけど、退屈しのぎに都庁に来てみた人の群れには近寄らず離れてみているとなにやら話が始まってさらにはチームを組む人達

そして一通りチームができるとぞろぞろと都庁に入っていた。

……私一人。

候補生の居ない広場

皆都庁に入っていたせいで一人取り残されている。

…帰ろう

そう思っていたのだけど、気が変わった。

私が帰ろうとしたときに一人の少女が現れた。

腰に二振りの剣と、ショートカットが特徴の少女

気がつけば私は知らない彼女に抱きついた。

なんというか、こう…

凄く安心できる。

……いい匂い

どれだけくっついていただろうか？

ふと見上げると彼女と目があった。

「…兎我野めぐよろしく。」

「よ、よろし…く？」

私を見下げる彼女は困惑の表情を浮かべている。

——かわいいなあ……

何故か昔から一緒にいたような……

そんな変な感覚に捕らわれる。

「——こほんっ。二人ともいいかしら？試験についてだけど……」

私と彼女の尊い時間を邪魔するナツメとかいう不粹な奴

……嫌い

何？何なの？

そんなに私の邪魔をしたいの？

そんな女なんか燃えちゃえば——

そう思い、手に火を灯し火を彼女に移そうとしたのだが
その手を誰かの手が優しく包んだ。

——彼女だった

「——えっ？」

自分の手を通して手が焼かれる感覚が伝わってくる。

とめなきゃ！

そう思って焦ったせい火は一向に弱まらない。

——どうしよう

私のせいでこの人は手に……

焦れば焦るだけその火は収まる気配がない。

体が震えてくる

私はまた……っ！

「…一回、深呼吸をして？焦っちゃダメだよ？」

「……うん。」

優しく私に語りかけてくる彼女
何故だか安易に飲み込めた言葉
できるだけ息を吸い、ゆっくりと吐く
そして意識を集中させ…

『消えろ…』

呟いた言葉と共に、火は消え去った
私は直ぐに回復のスキルを使った。

彼女の手が青い光に包まれみるみるうちに火傷は消え去った。

「よしっ！偉いね♪」

わしゃわしゃと頭を撫でられる。

…悪くない。

「…決めた。」

「？」

「私とチームを組んでください。お願いします。」

無理矢理ついていくのではなく
ちゃんとお願いしよう。

そう思い頭を下げた――

――ミナト視点

彼女は真剣な眼差しで「お願いします。」と言いつた。
もとは、人と組む気は無かったが、状況が変わった。
めぐと名乗った少女に引かれ私は一緒に行こうと決意したのだった。

「そろそろいいかしら？」

「あっ！すみません！」

完全に置いてきぼりだったナツメに声をかけられ向き直る。

「さてこれからだけど貴女達には都庁に入り込んだマモノを倒してもらいます。」

マモノなら多分大丈夫だが……

私は都庁を見上げる

……多分いるね。

左に差した刀がカタカタと震えている。

「所で試験は二人でいいのかしら？」

「はい！」

息が揃った返事

「それじゃあキリノから回復薬を受け取ったら試験開始よ。」

私達はキリノさんの所に行き回復薬を貰った。

「…さて、頑張ろうね。」

「…うん。」

腰にくっついてるめぐと二人の試験が始まった――

「いやあああっ!!」

何?何あれ!?

青くておつきくて――

「ガァァァァァ!」

「ひいっ?!」

「グルルル――」

「っ!…誰かたすけてえっ!!」

都庁3階に叫び声が響いた――

c a p t e r o カウント、ゼロ 1 (後書き)

感想お待ちしております m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0855z/>

7 t h D O R A G O N 2 0 2 0 一崩レ行ク世界デ

2011年12月6日08時47分発行